

<b>Title</b>	「ラインホルド・ニーバーの宗教・社会・政治思想の研究」(2013 年度 聖学院大学総合研究所ラインホルド・ニーバー研究センター：国際シ ンポジウム)
<b>Author(s)</b>	五十嵐, 成見
<b>Citation</b>	聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.23-No.1, 2013.9 : 29-30
<b>URL</b>	<a href="http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/rep/modules/xoonips/detail.php?item_id=4606">http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/rep/modules/xoonips/detail.php?item_id=4606</a>
<b>Rights</b>	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

## 2013年度 聖学院大学総合研究所ラインホルド・ニーバー研究センター 国際シンポジウム 「ラインホルド・ニーバーの宗教・社会・政治思想の研究」

2013年6月14日(金)青山学院大学青山キャンパス総研ビル(14号館)第19会議室にて、2013年度聖学院大学総合研究所ラインホルド・ニーバー研究センター主催国際シンポジウム「ラインホルド・ニーバーの宗教・社会・政治思想の研究」が開催された。科学研究費補助金基盤研究(B)の研究成果公開として計画された講演会のしめくくりであった(研究代表者:高橋義文総合研究所長、課題番号23320025)。特別講師として、ロビン・ラヴィン氏(Robin.W.Lovin南メソジスト大学名誉教授)と、任成彬(Yim,Sung-Bihn 韓国長老会神学大学校教授)氏をお迎えした。なお、ラヴィン教授は、11日に聖学院大学にて「キリスト教現実主義と新しい現実」(“Christian Realism And The New Realities”)として特別講義をされた後、12日は国際基督教大学にて「アメリカにおける教会と国家—憲法、文化、そして神学—」(“Church and State In America- Constitution, Culture, And Theology”)を、13日には東京神学大学にて「ラインホルド・ニーバーとキリスト教現実主義」(“Reinhold Niebuhr and Christian Realism”)と題して講演をされた。

### ラインホルド・ニーバーの思想は 現代においてどのような意味があるか

本シンポジウムは、そのハードスケジュールの最後となるものであった。また、任成彬教授も神学校での重要なご用事の合間を縫うようにして、日本に来日された。

今回のシンポジウムは、このお二方の講演を聞いた後、それぞれの講演のレスポンスを日本の神学者がなす形式で進められた。ラヴィン教授の講演に対して、千葉真氏(国際基督教大学教授)、及び西谷幸介氏(青山学院大学教授)が、任成彬教授の講演に対しては、東方敬信氏(青山学院大学名誉教授)、藤原敦賀氏(聖学院大学総合研究所教

授)が担当された。この報告では、紙面の都合上、ラヴィン氏と任氏の講演の要約のみ記させていた

だ。ラヴィン氏の講演の題は、「審判・自由・責任—21世紀のためのキリスト教現実主義—」である。ラヴィン氏によれば、ニーバーの思想は、政治における限界を常に見極めようとつとめる視座故に、現代においてこそ有益であると述べる。とりわけ重要なのは、その「歴史の神学」である。そのニーバーの歴史理解を、ラヴィン氏は「審判・自由・責任」の三つのタームにおいてとらえる。歴史における神の「審判」の受容は、全て(デモクラシーも含め)の人間の政治的選択が絶対的なものではあり得ないこと、全ての社会が偶像崇拜の危険を孕んでいることや歴史のアイロニーに巻き込まれていること、全ての権力が不完全であること、を理解させる。キリスト教現実主義は、その歴史のアイロニーを注意深く受け止め、なおかつ忍耐深く、歴史の持つ偶然性や不可避的变化、権力の脆弱さなどを深く洞察し、政治的選択を吟味したり反対する。そしてキリスト教現実主義もまた、このアイロニーの審判の下に服していることをラヴィン氏は暗に指摘する。その意味で、ラヴィン氏は、ニーバーの現実主義が、権力の現実の強調



ロビン・ラヴィン教授



任成彬教授

によってこの「審判」の受容を歪めた事例（公民権運動の急進的変革に対するの消極的な姿勢）を持っていることを批判し、人間の「自由」の自覚が、権力による傲慢の考察と共に、同じように強調されるべきである、とする。

今日において、デモクラシーが確立されている国、とりわけアメリカは、この自由の追求を適切に保つ役割が賦与されている。しかしこの自由は、かつてニーバーが指摘したように「リベラル・デモクラシーの曖昧な普遍主義」のようなものであってはならない。自由とは、文化的歴史的境界を越えて移植される一様に有用な思想体系、などというものではない。この自由の問題を巡って、21世紀のアメリカは深刻な問題を抱えている。政治が、特定の政治的選択を将来の勝利と結びつけて語る時、キリスト教現実主義は神の「審判」の下に服すべきことを語り、人間の自由の持つ偶像礼拝的要素を批判する役割を持つ。また同時に、自らが語る批判的問いに対して責務を追わなければならない。それは、想像力を持って相対的な善悪の判断をなしていくことであり、なお正義の追求のための「責任」にかかわっていくことである。

任成彬氏の講演題は「グローバル化の時代における平和に対する韓国教会の課題－ニーバー的現実主義を超えるエキュメニカルな社会倫理を求めて－」である。世界は、冷戦後、グロー

バリゼーション・軍事化・テロ・「文明の衝突」（ハンティントン）などの問題に直面している。その世界情勢の中で、ハンス・クンクによって提唱されたグローバル倫理などの解決が挙げられるが、それに対して任氏は、キリスト教に根差すエキュメニカルな社会倫理の探求を提唱する。それは、異なる宗教的伝統の独自性を尊重しつつ、キリストと教会の伝統に基づいた聖書の教えと社会的倫理の一致の必要を説く。そしてその見方は、ニーバーの「責任の倫理」と一致する、と任氏を見る。

エキュメニカルな社会倫理は、神の国と三位一体に基づいた世界観が前提である。それが個人の非偶像崇拜的な自尊心を育む環境となる。このエキュメニカルな社会倫理においては、「平和」の安定が重要なものとなる。その平和の安定は、「人間の尊厳」「愛と正義」「生命中心の生態系と共通善」の価値に基づいてしていくものである。そして、何よりもこの平和の安定の価値の根幹となるのが、「教会」である。平和に対する韓国教会の積極的な役割とは、何よりも「教会が教会であること」に尽きる。その教会形成は、グローバルな市民としてのキリスト者の品性形成を強化し、平和をつくる建設的な役割を担うであろう。

各氏の講演の後、前述した方々によってレスポンスがなされた後、観衆から積極的な質疑応答がなされた。この議論は、さまざまな課題で大きな危機に直面している現代世界において、ラインホルド・ニーバーの思想はどのような意味があるか？なぜ、いまニーバーか？という問いに集約されるであろう。

（いからし・なるみ 聖学院大学大学院アメリカ・ヨーロッパ文化学研究科博士後期過程）

補足

（やまもと・としあき 学校法人聖学院学事局長）